

芸文だより

第33号

平成28年3月15日
村山市芸術文化協議会

第51回村山市芸術祭シンボル事業 アウラ・ヴェーリス チェロ・ピアノコンサート



曲紹介などの楽しいトーク



終演後のサイン会

第五十一回村山市芸術祭シンボル事業「アウラ・ヴェーリス チェロ・ピアノコンサート」を十二月六日、市民会館大ホールを会場に開催しました。

アウラ・ヴェーリスは林そよかさん（編曲・ピアノ）、林はるかさん（チェロ）の姉妹ユニット。ユニット名は姉妹の名前に由来したラテン語で「春のそよ風」の意味。

第一部は、クラシックの名曲「白鳥」や美空ひばりの「川の流れるように」「真っ赤な太陽」などを演奏しました。

第二部はミュージカル「レ・ミゼラブル」や「サウンド・オブ・ミュージック」のメドレー、ジョン・レノンの「イマジン」「ウーマン」など馴染みの深い名曲を演奏し、美しい音色に加え、曲の合間のはるかさんによる曲紹介や演奏技法についての説明など、楽しいトークでも観客を魅了しました。

また、アンコールではお互いの楽器を交換して演奏するなど、姉妹ならではの息の合ったパフォーマンスを披露し、最後まで会場を楽しませてくれました。



次世代育成に向けて

思うこと

村山市芸術文化協議会

会長 須藤 正義

平成二十七年年度村山市芸術文化協議会総会において会長の要職に任命され、浅学・非才をも顧みずお引き受けしてから、間もなく一年が過ぎようとしています。

これといった実績も識見も乏しい私にとって不安を抱えての船出でしたが幸い、軽部伊藤両副会長のバックアップはもちろん、須藤幹事長他五人の幹事の皆さんと優秀な事務局のスタッフに支えられ、懸案の五十周年記念誌の発行と第五十一回芸術祭を無事終了することができました。改めて会員並びに関係各位に心より感謝申し上げます。

特に、五十周年記念誌発行事業は鈴木正弘氏をキャップに編集委員会で編集方針を決定。原稿依頼や資料収集等の作業も進み、刊行間近の九月に、編集委員として陣頭指揮を執ってこられた前幹事長の佐藤敏彦氏が急逝されたことは誠に残念であり、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

今年の芸術祭で感じたことは、多くの公演で出演者の減

少が目立ったことでした。少子高齢化や趣味の多様化による会員の減少に危機感を覚えました。しかし、この危機を乗り越えようとこれまで培った技と伝統文化を守り、次世代に引き継ごうとする責任感と自らもより高みに向けて強い意欲が各リーダーに感じられ、むしろ心強くさえ思いました。

社会音楽連盟加盟団体間では友情と強い絆が見られ、SKIP十回記念公演にフェブリエ、北村山吹奏楽団によるコラボステージ、北吹演奏会における村山産業高校吹奏楽部との合同演奏は共に観客に大きな感動を与えてくれました。若手の育成と後継者の確保に大きく寄与するものと期待しています。

次世代育成に向けて、心の豊かさや生きがいある生活を共有し、若い世代にも受け入れられる環境づくりに会員相互が連携して取り組んでいかなければと思います。

市民の皆さまどうぞ、芸術文化活動に深いご理解とご支援をお願い申し上げます。

SKIPスーパーライブ 10thアニバーサリーコンサート

昨年十二月十三日、ロックバンド「SKIP（スキップ・佐藤栄一代表）」が、十回目の記念となるコンサート「SKIP・スーパーライブ2015」を市民会館大ホールで開催されました。

SKIPは、昭和六十三年に結成し、「おやじバンド」として市民のみなさんに親しまれてきました。仕事や家庭などさまざまな事情からメンバーの入れ替えがあり、現在七人で活動・活躍しています。これまで、東沢バラ公園のパラマツリ出演や年一回のライブを開催するほか、四枚のCDを自主制作するなど、完成度の高い音楽活動に意欲的に取り組んでいます。

コンサートでは、開演と同時にギターのフレーズが会場に響き渡ります。十回目の節目でもあり、メンバーがいつも以上に緊張したステージになると思っていました。例年と変わらなず落ち着いた様子ですがベテラン。「おやじバンド」というだけのことはあります。



曲は、「乾いた風」「マイギター」など、メンバーが作ったオリジナル曲を十曲以上演奏しました。曲と曲の間には、代表を務める佐藤さんがトークでもお客さんを盛り上げます。ロックバンドのイメージとは違い、方言丸出しのトーク。曲や演奏の良さだけではなく、これもSKIPの魅力のひとつです。このトークのおかげで、ステージと会場は一体となり、演奏するメンバーにも力が入ります。

今回、十回目の記念として、社会音楽連盟の仲間である「村山混声合唱団フェブリエ」と「北村山吹奏楽団」との合



3団体がジョイントしたSKIPスーパーライブのフィナーレ

同演奏を企画。SKIPとそれぞれが二曲ずつ演奏を披露し、最後は出演者全員で「落陽」を演奏。この曲は、SKIPがこだわりの続けている吉田拓郎の楽曲で、合唱のコーラス、吹奏楽の伴奏が加わり、これまでとは違った大フィナーレとなりました。ロックと合唱、吹奏楽が一緒に演奏するというこれまでにないスタイルは、常に挑戦し続けているSKIPだからこそできるもの。お客さんや音楽仲間を大切にしたい演奏で、今後のさらなる活躍が期待される記念コンサートとなりました。

芸文協五十周年記念誌を刊行

平成二十六年度に芸文協は設立五十周年を迎え、それを記念して平成二十七年十月に記念誌を刊行しました。記念誌の刊行は、四十周年以来で十年ぶりです。

刊行に向けて、平成二十六年九月に刊行委員会を立ち上げ、刊行委員長に齋藤峻前会長を選出しました。さらに刊行委員から選出された編集委員は、鈴木正弘編集委員長を中心に編集委員会を重ね編集作業にあたりました。

記念誌は、特集として「10年を観る」をテーマに、芸術祭のシンボル事業の写真によ



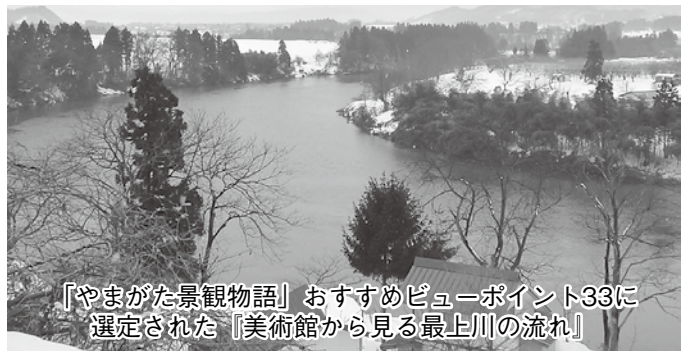
「座談会」の様子

る紹介と、齋藤美代三編集委員を司会に、須藤正義会長、下山薫顧問、笹原明士顧問、渡邊太兵衛顧問、齋藤刊行委員長、鈴木編集委員長による「座談会」。座談会では、芸文協の創世期とこれからの活動の展望、芸術文化の振興などについて語られています。そのほか、四十周年記念誌以降の十年間の活動を補完し五十十年間のあゆみをふり返る年表、歴代文化功労者や歴代三役の名簿、加盟団体ごとの活動の紹介など、充実した内容になりました。

完成した記念誌は、会員の皆様や一般の方に頒布したほか、近隣の図書館や芸文団体に謹呈するなど、たくさんの方々にご覧いただくことができました。



完成した芸文協50周年記念誌



「やまがた景観物語」おすすめビューポイント33に選定された「美術館から見る最上川の流れ」

真下慶治記念美術館を 最上川美術館に名称変更しました

真下慶治記念美術館は、平成十六年に村山市市制五十周年記念事業の目玉として開館し、最上川の景勝とそれらを描いた真下慶治作品の魅力を紹介してきました。

そしてこのたび、平成二十八年一月一日より「最上川美術館」に名称を変更しました。今後は真下氏の作品に加え、最上川や山形にゆかりあるより幅広い作品を展示するとともに、村山市の誇る最上川の景勝を全国に発信していきます。

また、同館のテラスから眺める最上川の風景が人々に感動を与える美しい景観として、山形県主催の「やまがた景観物語 おすすめビューポイント33」に選定されました。

選定の際には、景観の素晴らしさに加え、車でのアクセスや周辺の観光スポットへの立ち寄りやすさも考慮されているため、施設を広く発信するにあたり大変意義の深いものになります。

最上徳内記念館 没後六十年記念松岡俊三遺徳展

雪害救済運動の先駆者である松岡俊三没後六十年を記念し、遺徳展が九月十八日から最上徳内記念館で開催され、市長や郷土史研究会のみならずなどによるテープカットで開幕しました。

第一展示室は、雪害救済運動で東北地方などを遊説している写真や雪国と暖国の積雪を比較した図表など、昭和初期の貴重な資料が展示されま

した。特に、俊三が常に携帯していたといわれる小さな観音様には、人だかりができるほど注目を集めました。

第二展示室には、レコードに録音された俊三の演説が流れ、当時を知る方々から「なつかしい」との声が聞かれました。また、活動の様子が掲載された新聞など特別に手で触れることができる資料もあり、当時の様子が生き生

きと伝わってくるようでした。雪害救済活動に一身を捧げた俊三の活動と、その人となりをうかがい知ることができ、企画展となりました。



テープカットで開幕しました

第51回 村山市 芸術祭

第五十一回村山市芸術祭は、十月三十一日の吟友会「吟詠大会」を皮切りに、十二月十二日のおやしロックバンド「SKIP・スーパライブ」までの一か月半、村山市民会館を主会場に開催されました。期間中それぞれの会場には多くのお客様が訪れ、芸術の秋を満喫していました。



感動を呼んだ赤ひげ「ファミレスのパパロア」公演



和のハーモニーを楽しんだ三曲公演



甘い香りに包まれた五流派合同のいけばな展



幽玄の世界 謡曲公演



にぎわった芸術祭お茶会



手拍子が会場を包んだ津軽三味線と民謡舞踊フェスティバル



大作が出品された芸術祭美術展



懐かしい昔語り



温かい作品が並んだ手芸作品展



美しいメロディを披露



凜とした歌声が響いた吟詠大会



基点焼陶芸教室作品展示会



労作が並んだ人形・押絵展



厚岸との合同写真展



聴衆を魅了した「村山混声合唱団フェブリエ」



立派な枝ぶりを披露したさつき盆栽展

吹奏楽ってどんな音楽？

北村山吹奏楽団 岡村 浩明

北村山吹奏楽団は、平成十五年に設立しました。団員は、主に北村山地区から集まり、村山市民会館を拠点に活動しています。

さて、「吹奏楽」という言葉を聞くと、大まかにオーケストラやクラシックをイメージする方が多いかと思いますが、この吹奏楽とオーケストラには大きな違いがあります。それは、吹奏楽にはヴァイオリンなどの弦楽器がないことです。吹奏楽は、フルートやクラリネット、トランペットなどの管楽器と打楽器で編成されています。ただし、一番大きな弦楽器であるコントラバスだけ、なぜか吹奏楽の編成に含まれています。

そして、吹奏楽で演奏する曲ですが、クラシックだけではなくありません。歌謡曲や演歌、ロック、ジャズなど、なんでも演奏します。「音楽は好きだけど、クラシックは難しい」という方には、吹奏楽の演奏会がお勧めです。私たちは年に二回の演奏会を開催しています。そこでは、歌謡曲

やアニメソング、映画音楽など、みなさんに馴染みのある曲も演奏しています。きっと楽しんでいただけたらと思いますのでぜひ、足を運んでいただければと思います。

私たちは、保育園や福祉施設、地域のお祭りなどでも演奏をしながら、地域に根差した活動を心がけています。芸術祭参加の演奏会では、地域の中学校吹奏楽部などを招き、世代を超えた交流もおこなっています。今後も、吹奏楽をおとした音楽の輪を広げ、音楽で地域を盛り上げていきたいと思っています。



村山産業高校吹奏楽部を招いた秋のコンサート

『和』に対する気持ち

日本舞踊若三三会 板垣 恵里



十一月三日。四十年以上舞袖から弟子を見守ってくれ

た佑二三先生の姿は、客席の真ん中で写真の中から見守っていました。四月、訃報はあまりにも突然でした。先生は、師匠としてはもちろん人としても尊敬できる憧れの人でした。

そんな悲しみから始まった今年、市芸術祭開幕パーティーや新年祝賀会のアトラクションなどへ参加させていただきました。また、数人ですが会員も増え日舞に興味を持って

エッセイクラブの現況

村山エッセイクラブ 齋藤 美代三

今、エッセイクラブが抱えている最大の課題は、会員の高齢化であり、若い方の入会がないということです。

この解決に取り組んでほしいものの、簡単ではありませんが、会員減少傾向に対する点については、何とかい止める努力が報いられてはいるものの、若い方の入会が得られません。この解決方法は、会員の内容充実と同人誌によるP

いただいたことを嬉しく思いながら、発表会等に向けて日々稽古に邁進しています。近年、日本の伝統文化に興味を持つ若い人が少ない中、時々『着物女子』などの言葉

を耳にします。七五三や成人式で着物を着たとき、なんとも言えない緊張感やちよつと背伸びできた気持ちを感じて

R以外にないと考えています。今年、クラブ創立二十周年

になる節目を機会に、記念号を発行し、その内容に工夫を加えてみる試みを考えているところ。同人誌愛読者コーナーなども設定すべく編集を進めているところなので、皆様の忌憚のないご批評ご指導を奮ってお寄せくださることを、お待ちしております。会員の日頃の活動は奇数月



の第三土曜日を基本に楯岡地域市民センターで、作品を持ち寄って、合批会を行っておりますので、遠慮なくおいでください。

書は生涯の友

村山市書道会 青柳 春城

書は、生涯にわたって学び、創造し、表現することができ、元々は中国大陸からの伝来なのでしょうが、しっかりと日本文化として根付いており、いくらパソコンが普及したとしても、文字を自分の手で書く機会はさまざまな場所でもまだまだあると思いますので、たまには筆を取って名前でも書いてみてはいかがでしょうか。

さて、市書道会の主な活動を紹介いたします。六月の筆供養、これは東沢公園内にあります筆塚の前で、会員のほ

か、県屋外美術広告協同組合の皆様からも参加をいただき、使い込んだ筆に対し感謝をこめて供養を行なっております。

十月には、市芸術祭の書道展を市民会館で開催しております。漢字、かな、調和体、近代詩文などの変化に富んだ創造性豊かな作風の作品が展示され、来場される方々の視覚を楽しませております。

十一月に行なわれています書の色紙展の会場は飆葉プラザです。市長、市議会議員、県議会議員の皆様からも出品いただいております。作者一

人ひとりの個性溢れる多様な作品ばかりで、皆様に大いに喜ばれております。



両展共、百点以上の出展があります。書道展の作品の大きさは、半切（三十五cm×百三十六cm）以下となっております、小ぶりの作品ですので、色紙展共々チャレンジしてみたいかかと思えます。額に入れると凄いい作品に仕上がります。

柴田 秀（西郷・杉島諏訪太鼓保存会）

瀧田 光菖（西郷・書道会）

松田 律子（楯岡・書道会）

樽石 良一（楯岡・フォトクラブ）

山形県総合書道展 山形県総合書道展賞
山形県写真展 山形市議会議長賞

SKIIP（社会音楽連盟）

股旅舞踊に魅せられて

松舞踊村山塾 田中正信

股旅が大好きなわけ

長い冬から解放され、待ちに待った春祭り……青年団の人たちが小屋掛けし踊っていました。縞の合羽に三度笠、「名月赤城山」「旅笠道中」……など村中あげて楽しんでいます。あの頃の懐かしい思い出が蘇ってきます。

大衆の共感を呼ぶのは何故か？
「股旅」とは、おもに博徒、それも旅鴉と呼ばれる俠気にとんだ腕の立つ渡世人が主人公です。その主人公が悲境に泣く弱い人々を助けた後、また当てのない旅に出るというのが一般の筋であります。

股旅舞踊を始めたきっかけ
十二年前、村山市で「第一回股旅舞踊全国大会」が開かれました。全国から猛者が集い、見事な刀さばきや演技が競われました。私たちは、すっかり魅了され、また、

「我流では駄目だ」と決心し、宮城県の松としはる先生・松ゆうか先生に指導をお願いしたのであります。

公演依頼が相次ぐ
その後、同好の仲間も増え、

福祉施設等への慰問が増えました。また、近年は股旅舞踊の人氣が高く、県内はもとより宮城、岩手、青森など県外からの出演要請が相次ぐようになりました。

私たちの夢

私たちには大きな夢があります。一つは、股旅を通して村山市の「まち興し」につなげたい。二つ目は、股旅の世界は、義理と人情の世界です。義理、人情は、私たちの先祖が大切に守ってきた日本人の「こころ」です。そういう素晴らしい「宝」を、股旅舞踊を通して多くの人に伝えていきたいです。



芸術文化功労者を表彰



村山市芸術祭開幕式の席上、平成27年度芸術文化功労者が表彰されました。誠におめでとうございます。
(10月30日市民会館)

【感謝状】 【栄光章】 【功労章】

笹原美智子さん 『日展』 初入選



この度の改組新第二回日展において、笹原

美智子氏（市書道会副会長、戸沢）が書部門に「盛時泰」の漢詩を出品され、見事、初入選を果たされました。これはひとえに常日頃からのためみない努力の結晶であり、心よりお祝いを申し上げます。

氏は近年、読売書法展、県総合書道展をはじめ各書展にお



いて、連続して極めて優秀な成績を収めており、いわば当然の成り行きと感じております。入選作は、永年培った書風に更に磨きをかけ、穏やかな大らかな気分が漂う心豊かな三行縦型式の作品であり、悠々とした柔らかい筆の運びが自然な文字の流れを生んで

いると高く評されている素晴らしい作品であります。氏はまた、指導者としても手腕を発揮されており、多くのお弟子さんたちの道標として、また、書道の普及に尽力しております。今回の入選を機に、市、県書道界のみならず、日本の書の発展及び普及のためなご一層のご活躍、ご躍進をお祈り申し上げます。

注目!

陶芸家 大原功樹さん

大原功樹さんは村山市楯岡出身。東京藝術大学工芸科、同大学院を卒業し、平成十七年に埼玉県秩父市に窯を築きました。

彼は、自然から受けるイン



スピレーションを大切にして作品をつくっています。例えば、路地に咲いた草花の地面から生えてくる曲線や雄しべ雌しべの重なり、風でできた砂の模様など、すべてがものづくりの動機や衝動になっています。そして、少年時代の山登りや東沢公園での魚釣りなども、今の作品づくりの重要な要素になっています。彼の作品は、不織布という布を使い、それをモチーフの形に切り、そこに顔料を染み

込ませて絵付けを施す「布染」という技法で作られます。透けたような柔らかな表現で魚や草花、幾何模様などを描きます。彼のポリシーは「オリジナリテイー」「美しい形」「品格」の三つを指標として「器を芸術に」。その作品は今年、イタリアのイベントでも展示。建築やデザイン分野で大きな影響力のあるイタリアの雑誌、Domusのウェブサイトにも掲載されました。今後、国内にとどまらず、国外での活躍も期待されます。

平成二十七年年度 村山市芸文協のうごき

4・22	会計監査
4・30	三役幹事会・理事会
5・22	総会
5・30	県芸文協会総会
7・6	三役幹事会
7・17	理事会
7・25	山形交響楽団村山定期演奏会（後援）
10	芸文協50周年記念誌刊行
10・6	芸術文化功労者選考委員会
10・11	東京村山会（会長出席）
10・14	県美展子ども県展村山巡回展（後援）
10・30	村山市芸術祭開幕式・功労者表彰式
12・6	シンボル事業「アウラ・ヴェーリスチェロ・ピアノコンサート」
12・18	市芸術祭反省会
12・21	北村山芸文協懇談会（村山市）
1・12	芸文だより編集委員会
2・28	オペラ「魔笛」(後援)

あとがき

福寿草の花咲く頃となりました。今年の冬は穏やかで積雪も少なく、一般市民にとっては過ごしやすい冬であったと言えそうです。

五十歳を越えた村山市芸文協ですが、各団体とも会員の高齢化と会員減少に頭を痛めているのが現状です。しかもこれが最大の課題となっております。

そうした中であって、各団体とも、活動や内容において進化をとげている状況が見られることは、素晴らしいことであり、高く評価できます。芸文だより第三十三号ができました。皆様にお届けいたします。

（文責 齋藤美代三）

芸文だより編集委員

- 齋藤 美代三 (村山エッセイクラブ)
- 岡村 浩明 (村山市社会音楽連盟)
- 青柳 孝雄 (村山市書道会)
- 板垣 恵里 (日本舞踊若三三会)
- 堀 澄雄 (村山フォトクラブ)
- 田中正信 (松舞踊村山塾)